

宇宙は何からできている?

初期の哲学者たちは自分の周囲の世界を考察し、そこに存在する事物はなんらかのものからできているはずだと考えました。その最初の問い、「世界は何からできているのか?」が、形而上(けいじょう)学という哲学の主要部門のはじまりでした。形而上学は、存在するとはどういうことか、存在の本質は何かということに関わる哲学です。

宇宙をつくる物質

ギリシアの沿岸植民市ミレトス(今のトルコ西部)が、私たちの知っている最初期の哲学者たちの生まれ故郷です。そのひとり、天文学者、技師でもあったタレスは、この世界は何からできているのかという問いにひきつけられ、驚くべき理論を考え出します。あらゆるものは、たったひとつの物質、水から成り立つと考えたのです。水はどんな生命にも不可欠である、陸地は海から出現するように見える、水は液体・気体・固体というさまざまなかたちで存在する、ゆえにあらゆるものは、なんらかの存在形態をとった水からできているにちがいない、と推論したのです。タレスは自分の新しい哲学的観念を他の思想家たちに教え、弟子だっ

生き続けるアイデア

初期ギリシア哲学には恒久的な影響力があった。エンペドクレスの4つの基本的元素という考えが進化して、現代化学となり、「元素」という用語を今も使っている。現代物理学の考え方も用語も、原子論の粒子説と共通する。あらゆるものが究極的にはひとつの物質から成るという主張までもが、すべての物質はエネルギーであるというアイデアとなって、現代物理学にのみがえった。

たアナクシマンドロスは、地球を支えるのが水だとしたら、水を支える何かがあるはずだと指摘しました。アナクシマンドロスのあとにもさらに哲学者たちが続き、新説を提唱していきます。たと

**万物は
水からできている。**

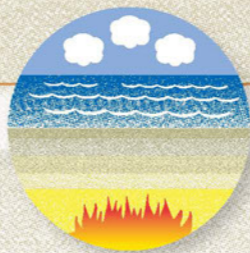
ミレトスのタレス

えばアナクシメネスの説は、地球は空気中に浮かんでいるのだから、空気が宇宙でただひとつの物質だということでした。

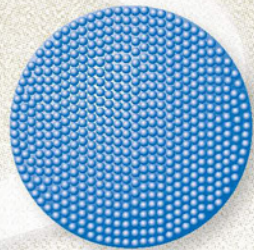
何かがある状態と、何も無い状態

初期の哲学では、宇宙は究極的にはひとつの「実体」から成ると考える一元論が優勢でした。一元論と一緒に、宇宙の根本的な性質は何か不変のものであるという考えが現れました。パルメニデスという哲学者の主張によると、何かが存在すると同時に存在しないということはありません。何もない状態はありえない——「無」などというものは無い。ゆえに、存在するものが無から生じたはずがない——存在するものはずっ

……それとも4元素か……



……あるいは無数の微粒子か?



宇宙を
構成するのは……

……ひとつの物質か……

① 1か4か多数か?

初期の哲学者たちは、宇宙はすべて水からできている、あるいは4元素からできている、あるいは微小な原子からできている、と推論した。そうした初期のアイデアは、今でも議論の対象となっている。

ある、と提唱し、それらを「元素」と呼びました。火、水、地、風の4元素です。元素自体は不変だが、4元素がさまざまな割合で結合して世界のいろいろなものになり、その結合は絶えず変化する、というのです。また、デモク

タレスは日食をぴたりと予測した。どうしてそんなことができたのか、今でもわかっていない。

リトスとレウキッポスの考案した、「原子論」もあります。あらゆるものは、原子という、きわめて小さくて不変の、それ以上分割できない粒子からなるという説です。それによると、原子がか

らっぽの空間を自由に動きまわり、互いに結合しあって、この世界で私たちの目に見えるさまざまな実体をかたちづくりします。実体が死んだり朽ちたりすると、原子は再結合して新しい何かをかたちづくるのです。

と存在してきたはずであり、無になることもまたありえない以上、これからも常に存在するだろう、というのです。すると、どこにも「無」がないので、宇宙は何かで満たされているにちがいません。その「何か」が、不変でしかも永遠の、ひとつの「実体」なのです。

元素と原子

宇宙の本質は根本的に不変だというパルメニデスの主張とは違う意見をもつ哲学者たちもいました。そのひとり、エンペドクレスは、この世界で私たちが目にするのできる多種多様な事物も、また、世界が絶えず変化しているように見える理由も、パルメニデスの理論では説明しきれないと考えました。そして、実体はひとつではなく4つ

**原子とからっぽの空間以外には、
何も存在しない。
その他のものはすべて
単なる「考え」にすぎない。
デモクリトス**

プラトン

紀元前 427-前 347

プラトンはギリシアの都市国家アテナイに生まれましたが、その前半生についてはよく知られていません。詩と音楽を学び、コリントスのイストミア祭では格闘技に出場し、アテナイ軍で兵役を務めたと言われます。名門一族に生まれ、古代ギリシアでは政治家になる運命だったであろうと思われそうですが、結局、哲学者ソクラテスに弟子入りしました。

ソクラテスの遺産

プラトンはその師から多大な影響を受けた。紀元前 399 年のソクラテスの死後、アテナイでの公職をなげうってあちこちを旅して回り、イタリア、エジプト、リビアを訪れた。哲学について著作を始めると、自らが直接語るうとはしなかった。公の場でソクラテスが他者を相手にやりとりした、さまざまな会話を記録して、『対話篇(へん)』と呼ばれるものを書いた。



アカデメイア

紀元前 387 年、アテナイに戻ったプラトンは、天文学や哲学など幅広い学科を学ぶ学園、アカデメイアを創設した。生徒にはアリストテレス、クセノクラテスのほか、プレイウスのアクシオテアら、少数ながら女性もいた。プラトンは甥(おい)のスペウシッポスに学園の後を託し、アカデメイアはその後 900 年余り存続した。

完全なかたちの世界

プラトン哲学の中心的な観念のひとつに、イデア界がある。イデアとは、不完全な世界で私たちが直接経験する事物の、完全にして不滅のかたちのことだ。プラトンはこの概念を、「鎖につながれて洞窟の壁に顔を向け、太陽を背にしている人間たち」のたとえ話で説明した。真理を表す太陽に背を向け、真理の影しか見ていない人間たちは、それを現実のかたちだと思い込むというのだ。



失われた都市アトランティスの伝説が初めて現れたのは、プラトンの著した『ティマイオス』と『クリティアス』という2つの対話篇の中だった。

「公共の事柄への無関心のために
善良な人間が支払う**代償**は、
**悪い人間たちに
統治**されることだ」

国家

西洋哲学に大きな影響を及ぼしたプラトンは、30 を超える対話篇を著している。紀元前 380 年頃に書かれた『国家』は、プラトンの代表作のひとつ。正義の本性、個々の人間はいかにして徳をそなえることができるか、理想の国家とはどのようなものか、といったことが考察されている。プラトンはまた、高潔な人生が幸福な人生につながることも主張した。



私が存在することの意味は何？

存在についての問題を考察する哲学者たちは、周囲の世界から、世界の内の私たちの場所へと、目を転じるようになりました。人間の存在の本質、つまり私たちは個人としてどのように存在するのか、私たちは自分の人生に意味を見いだすことができるのか、ということ考察した哲学者もいます。

私たちには選択の自由がある

セーレン・キルケゴールは、人生に意味を見いだそうとしたが、神への信仰を決して失わなかった。

人間として存在するとは何を意味するかに目を向けた、最も有名な哲学者のひとり、19世紀デンマークの哲学者セーレン・キルケゴールがいます。存在についての哲学的説明は数あるが、自分がどういう人生を送るかについて、私たちには道徳的判断を下す自由があり、それこそが私たちの人生に意味を与えるのだ、とキルケゴールは考えました。しかし、この選択の自由は、私たちに必ずしも幸福をもたらしてはくれません。逆に、どんな選択をするのも自由だと知ると、精神が混乱し、私たちは恐怖や不安を感じます。キルケゴールの言うこの「自由の眩暈(めまい)」は、私たち自身の存在と個人的責任に気づくところから生じるものです。そこから私たちは、絶望して何もしないことを選択するか、不安から逃避せず「真正に」生きて人生に意味を与えるよ

うな選択をするか、決断しなくてはなりません。

可能性に気づく

私たちは自ら人生を自由にかたちづくるのだ、というキルケゴールの考えは、他の哲学者に引き継がれていきました。たとえばフリードリヒ・ニーチェは、しきたりや宗教が定めることを押しつけられるのではなく、自ら自分の可能性に気づくのが、各個人の責務だと主張しました。後にエドムント・フッサールは、もしカントの言うように、空間と時間から切り離された、私たちが理解したり経験したりできない、「物自体の世界」があるなら、世界について私たちがもっている観念はどれもただの推測にすぎない、という見方をしました。実践的なことが目的なら、それを無視して、私たちが経験するとおりの世界に注意を集中して差し支えないでしょう。フッサールはこれを「生活世界(レーベンスヴェルト)」と称しま



私たちには人生に自分なりの意味を見いだす自由がある。

自由思想

個人には、自分の人生をどうにでもしたいようにする自由がある、と考える哲学者もいる。社会の制約の範囲内で生きなくともいい、ということだ。

した。私たちの経験に注意を集中するこの主観的アプローチを、マルティン・ハイデガーが受け継ぎます。ハイデガーによると、哲学は存在の意味を見いだそうとしてきましたが、存在を理解するには、まず私たちにとって存在するとは何を意味しているのかを、考察しなければならないのです。

人生の意味

ハイデガーの着想は、次世代の、特にフランスの哲学者たちに大きな影響を及ぼしました。20世紀後半に台頭したその哲学を表す、「実存主義」という新しい用語ができました。人間の実存を考察する——とりわけ、ますます神や宗教の影が薄くなってきた世界における、人生の意味や目的を探求する哲学です。実存主義の主要な哲学者、ジャン＝ポール・サルトルによれば、私たちはひとたび自らの実存を自覚すれば、人生に意味を与えるべく、自分自身の目的をつくりださなくてはなりません。

サルトルと同様、哲学者でもあり小説家でもあったアルベール・カミュは、さらに悲観的でした。私たちの人生には本来意味などなく、私たちの自己認識から生じる不安に対処するには、実存の無意味さと不条理を受け入れるか、まるっきり実存しないことにするか、どちらかを選択することになるというのです。

人は自由であるという刑に処せられている。なぜなら、いったん世界に放り込まれるや、自分のすることすべてに責任を負うのだから。

ジャン＝ポール・サルトル

実存的不安

自らの実存と自分に与えられた選択肢を自覚するようになったとき、私たちが感じる不安——「実存的不安」を、セーレン・キルケゴールは、絶壁のふちに立つときの感情にたとえた。私たちが不安なのは、落ちるのが怖いからだけでなく、衝動的に身を投げ出しそうになるからでもある。飛び下りるか飛び下りないか決めるしかないのだと、私たちは気づく。



いったいなぜ存在があって、なぜいっそのこと無ではないのか？
それが問題だ。
マルティン・ハイデガー